

森・川・里・海の連環で「里島」復活を 自然環境の再生から取り組むツシマヤマネコの保護活動

前田 剛

絶滅が危惧されているツシマヤマネコの保護活動が展開されている長崎県対馬島。「ヤマネコか人か」という二項対立の保護ではなく、ヤマネコも人も共に生きる島づくりを目指す著者のまなざしは、森から川、里、海への連なりに向かう。つながり、循環する自然環境の再生が、ひいてはヤマネコも人も守る——。対馬を「里島」と称し、ヤマネコを介して描く島のこれからの語つてもらう。

ヤマネコの 縁から始まった西表島の暮らし

ヤマネコの縁と言えばそういうことになる。妻との入籍日も二月二二日の「猫の日」で、しかも平成二二年の午後二時二二分であった。ツシマヤマネコ（註1）の島、長崎県対馬に定住した今、もう、ヤマネコとは切っても切れない縁となつてしまった。

ある日、学生時代の恩師と対馬で偶然再会した。「君、

確か西表島（いりおもてしま）に住んでいたと記憶していたが、対馬にいる

とは。まさにヤマネコのようにだ」と笑われた。

実は、ヤマネコとの縁は沖縄県西表島から始まる。「君は酒が飲めるから、西表島に移り住み、島の人の暮らしぶりや本音を調べてほしい」。そう誘いがあったのは二〇〇一年、大学四年の冬。進学が決まった矢先のことだった。何をためらおう、島で暮らせるチャンスである。鳥数はわずかだが、佐渡（新潟県）、鷹島（長崎県）、沖縄やフィリピンの離島などへの旅行経験から、島暮らしへの憧れがあっ



「里ネコ」とも呼ばれるツシヤママネコ（写真提供／川口 誠）。

た。大学院入学式の二日後に休学手続きを済ませ、西表島に移住した。

西表でのミッションは、イリオモテヤマネコ保護と鳥社会の共生のあり方を探ること。島では、一九七〇年から一九八〇年代に生じた自然保護と開発をめぐる「ヤマネコか人間か」という二元論的な対立が尾を引いていた。正攻法のヤマネコ保護では島の人の反発を招いて失敗するとされ、「ヤマネコも人間も」という共生のあり方を、島の人の暮らしの中に入り込んで調査した。

島では、海人、農家の生業を手伝い、公民館や青年会組織にも所属した。「マイピトゥムトゥウビリバ イチマンム トウ……」（稲苗を一本植えれば一万本に）、西表最大の伝統行事である節祭^{シナ}では狂言を必死に覚え、土ほこりにまみれながら棒術を練習し、本番で奉納させていただいたことは貴重な体験であった。

島の人は、畏敬の念をもって自然に接し、自然災害の脅威や島チャビ（離島苦）にさらされながらも、郷土愛に満ちあふれ、家族や集落の固い紐帯に幸せを感じながら、しっかりと暮らしていた。島には数多くのイターン移住者がいた。島のおじい、おばあから生きる知恵や技を教わる者のんびりと芸術活動に励む者、思いのまま三線やジャンベを鳴らす者。都会の喧騒とまったく無縁に、島の自然や人々に育まれながら暮らす人間回帰のライフスタイルに、



西表島干立集落の節祭では棒術を奉納した。

いつしか憧れを持つようになった。

島の暮らしを知れば知るほど、島の人に情が移る。どうやったらイリオモテヤマネコを守れるか、保護と開発を上手く調整できるか葛藤した。しかし、どうしてよいかわからず、大学で学んだ理論を借りてレポートをまとめたことがあった。「外の理論の押しつけは、反発しか生まれない島の人の視点に立て」と離島振興の専門家に一喝された。

環境配慮というと、我慢というイメージがつきまとう。そうではなく、「自然と共生してきた。ヤマネコは俺たちが守ってきたんだ」という島の人に潜む根底意識を奮い立

たせ、無意識的に島の人がある自然の管理能力を、自覚的な管理能力へ移り変わらせることが、自然と共生する島社会づくりの基礎だと実感した。

対馬へ移住、

ヤマネコの島からヤマネコの島へ

二〇〇三年、一年余りの西表生活を終え、大学院に復学。「八重山病」に悩まされながらも、しばらくは研究の日々が続いた。

ある日のこと、「今、ツシマヤマネコの保護が盛り上がりつつある。君は、西表の経験があるから、対馬に行ってみないか」。次は、インターネットの連載記事の取材依頼だった。まさにヤマネコの縁である。西表にいた頃から、対馬の取り組みは気になっていたので、跳び上がる想いで対馬に渡った。

対馬では、「人かヤマネコか」ではなく、「人もヤマネコも」と、保護と地域振興の両立を目指しながら、徐々に活動の輪を広めようとしていた。その輪は、無理にヤマネコ保護に仕向けるものではない。懸命にヤマネコ保護に取り組み姿もあれば、豊かな海を取り戻すために、豊かな森をつくらうという漁師の姿もあった。目的やきっかけは何でもいい。結果として、島が元気になり、ヤマネコにとっても暮らしやすい対馬になればいいという考え方があったの

だ。

取材最終日の夜、忘れもしない二〇〇四年六月二〇日午後一時五五分。「あちやく、ヤマネコや。ひかれちよる」。地元の方にホタル観察に連れて行ってもらう途中のことだった。母ヤマネコの死を目のあたりにし、本当にヤマネコがこの島からいなくなるかもしれないと鳥肌が立った。この出来事は、対馬に移り住む決定的な動機となった。それがなければ、いま対馬に住んでいなかったであろうほど、強烈なものだった。

取材後、私も保護活動の輪に加わりたいと対馬通いを続けるうちに、二〇〇五年六月には、対馬野生生物保護センターのアクティブ・レンジャー（註2）として、ツシマヤマネコ保護の最前線に立っていた。

同じヤマネコの島でも 異なる自然環境

西表と対馬という日本で唯一ヤマネコが生息する島に両方住んだことのある人間は、私と、奄美大島に暮らしているTさんのご家族ぐらいだろう。これは、私のちよつとした自慢である。そこでよく尋ねられるのが、西表と対馬の違いである。

西表も大きな島だが、対馬はさらに大きい。しかし、世界的に見れば、野生ネコの生息する島の中では、西表は世



対馬島の風景（旧峰町の青海集落）。

西表島の風景（仲良川）。



界一の小ささで対馬は二番目である。共通して、険しい山に覆われた「山の島」であるが、西表は神秘的で鬱蒼とした亜熱帯雨林が広がる一方、対馬は四季が明瞭で絶えず人の手が加えられてきた里地里山が広がり、ずいぶんと表情は異なる。

このような自然環境の中に、両島には、ヤマネコをはじめとする大陸系の動植物や島固有の種などが混在する。生態系の頂点に立つ野生ネコを支えられるだけの自然が今もなおあることは、島の大きさからすると驚異としか言いようがない。

このように、生物多様性の保全上極めて重要な島の中に、西表では約二三〇〇人が農業や観光業などを営み、対馬では約三万五〇〇〇人が農林漁業、建設業などを営みながら暮らしている。

森・里・川・海が つながる対馬の暮らし

マナヅルやヤマシヨウビンなど渡り鳥の姿を見ると、島には境界がなく、対馬が鳥を介して世界とつながっていると感じる。鎖された島という空間から解放された気分になる一方で、ツシマヤマネコやツシマサンシヨウウオなど島固有の種を見ると、ここが島であることを強く感じ、独自の進化を遂げた生物の多様性に、私という存在がちっぽけ



対馬では日本蜜蜂の巣箱を「蜂洞」と言う。スギなどの丸太をくり抜いた洞を山の斜面に据える。島だからこそ日本蜜蜂だけが生息し、森林資源が豊富で、熊がいない島ゆえ古くから続いてきた伝統文化である。「島の宝100景」のひとつ。



減農薬で育てた佐護ヤマネコ稲作研究会の「ツシマヤマネコ米」。500mlペットボトル1本500円（ヤマネコへの寄付金つき）。個人的には、自動販売機での販売も企んでいる。

であるかに思えてくる。「対馬に住んでいて何が楽しいのか。西表の方がよかつたのではないか」。よく尋ねられる質問である。朝鮮半島と

九州の間に飛び石のように浮かんでいる対馬での暮らしは、島という特殊な環境にかかわらず、アジアとのつながりを意識させ、グローバル（地球規模の視野で考え、地域視点で行動すること）な視点で生活できることに魅力を感じている。

対馬での生活は実に楽しい。毎日、韓国プサンの山並みや夜景を見ながら通勤するだけでも楽しい。リアス式海岸の穏やかな海をマイシーカヤックで漕ぎ、誰もいない浜辺に上陸しては、コンロでコーヒーを沸かすのも楽しい。島の人から、釣りの仕方、蜂の飼育方、消防団の仕来りなどの生き方を教わるのも楽しい。何もかもが新鮮で発見の連続である。その中で、渡り鳥たちが告げる四季の移ろいを感じながら、シイタケや和蜂蜜などの森の恵み、ソバやアスパラガスなどの里の恵み、アユやモクスガニなどの川の恵み、ヨコワやヒジキなどの海の恵みを旬で味わう。季節感があり、森・里・川・海が一体となった人間らしい暮らしは実にいい。

二年前からは、新たな三K農業（かっこいい・感動がある・稼げる農業）を模索するために自ら完全無農薬の稲作にチャレンジしている。田んぼで育つのはお米だけではない。数多くの生き物たちが

田んぼで生育している。ツシマヤマネコも鳥たちも然りである。

田んぼで育つカエルやトンボなどの生き物たちが愛おしい。ヤマネコが田んぼに近寄ろうものなら跳び上がるように嬉しいし、田んぼの涼しい風に吹かれながら、生き物に満たされた風景を眺めると心も体も安らぐ。花鳥風月、身土不二とふに。言葉しか知らない若者世代の私にとって、人間も自然の一部なのだという人間本来の感性を実感できることは幸せなことである。

農業体験を通じ、ヤマネコや農家の暮らしを少しでもよくしたいと、地元農家の有志らとともに「佐護ヤマネコ稲作研究会」を立ち上げ、「ツシマヤマネコ米」の試験的な生産・販売にも取り組んでいる。

地元自治会である佐護区（対馬の最北西端に位置する地域の事務局長という肩書きも仰せつかり、地区民の体育大会や清掃ボランティア活動、お祭など、地域活性化のサポートをさせていただいている。かつて全山草原であった佐護のシンボル・千俵せんびょう蒔山まきやまの風景を取り戻すプロジェクトに参画し、四〇年ぶりに野焼きを復活することもできた。今では春の風物詩として定着しつつある。

ヤマネコレンジャーとしての 四年間



千俵蒔山の野焼き
(写真提供／鬼塚喜隆)。この山には大陸との近さゆえ、防人の時代には烽の第1烽が置かれていた。対馬から言岐島などを経て太宰府に送られた継火で、国防上、重要な情報伝達手段であった。

地元の人に「ヤマネコセンター」と呼ばれる環境省の直轄施設がある。私が二〇〇五年六月に対馬に移住し、四年間勤務した対馬野生生物保護センターのことである。ここには一〇名のスタッフが日夜ヤマネコや対馬のために懸命に働いている。わずか五〇キロ先にはプサンを望むことができるほどの「最果て」にも関わらず、ヤマネコに魅せられてしまった人たちが全国から集まっている。ヤマネコの縁とは不思議なもので、単にヤマネコと人が結びつくだけでなく、ヤマネコセンターをインテrfェースに、今や多くの動物園や研究機関、民間団体、企業などが結びつき、「チームヤマネコ」の輪が全国規模のものとなっている。

特に、動物園を拠点に広がる輪には圧倒される。現在、ヤマネコの野生絶滅を回避するため、福岡市動物園（福岡県）、井の頭自然文化園（東京都）、よこはま動物園ズーラシア（神奈川県）、富山市ファミリーパーク（富山県）、佐世保市亜熱帯動植物園（長崎県）でヤマネコを飼育していただいている。

動物園では、単にヤマネコを飼って増やすだけでなく、野生下では得がたいデータの収集や、知名度が高いとは言えないヤマネコや生息地対



井の頭自然文化園の「ヤマネコ祭」では、麻布大学の学生による人形劇が行われた。



アクティブ・レンジャー時。集落ワークショップでファシリテーションを行う。

馬のことを来園者に伝え、保全活動や地域振興の後押しもしていただいている。対馬の観光・親善大使であるヤマネコが常駐するアンテナショップにもなっていた。

のだ。

井の頭自然文化園では「ヤマネコ祭」というイベントが開催されており、昨年参加して驚いた。学生たちがヤマネコの人形劇を熱演していたり、音楽家たちが『どんぐりと山猫』（宮沢賢治著）の合奏をしていたりと、地元対馬側も予測できないくらい加速度的かつ多面的に輪が広がっている。

私は、ヤマネコセンターの中で、主にヤマネコ保護と地域振興の両立を探ってきた。前述のヤマネコ米や千俵蒔山の草原再生の取り組みは、当時業務として仕掛けた企画だった。ヤマネコを守るために、環境に配慮した農林業・開発をしましよ云々と呼びかけるだけでは何も変わらない。ヤマネコ保護が地域の発展や島の住民の福祉につながり得るような具体的な提案がなければ、単なる足かせと見なされてしまう。過疎によって社会経済的に低迷している対馬では、ヤマネコ保護の重要性だけを強調することは、島の人に嫌悪感も与えかねない。そういう状況の中、どうやったら、島の人が自分たちの問題としてヤマネコ保護に取り組んでくれるのか悩んだ。島の住民に納得してもらうには、お願いだけをするのではなく、自らも汗をかくことが大事だと痛感した。

ようやく脂がのってこれからだというタイミングでの退職であった。志半ばで絶滅の途にある野生生物を、その保

護のために積み重ねてきたことを見過ごすことは非常にづらいものがあつた。地域に根差した活動をしたいと、今も島を離れることなく、自らも当事者になって継続している。

—— ヤマネコだけでなく、 鳥も魚も人も守る

ヤマネコは、ヤマネコだけを見ていると守ることはできない。それは、ヤマネコの存続を脅かす原因のほとんどが人間生活に由来するものだからである。

西表とは対照的に、対馬の島の九割は民有地である。ヤマネコが減った原因として大きいのは自然環境の変化だと思っている。ヤマネコを守るためには、ヤマネコが安心して暮らせる環境を取り戻してゆかねばならない。

前田 剛



1979年長崎県雲仙市生まれ。財団法人国立公園協会の調査員として2001～2003年度にイリオモテヤマネコ保護事業に関わり、ヤマネコの縁で2005年6月、対馬野生生物保護センターアクティブ・レンジャーとして対馬へ移住。2009年10月に対馬市役所に入庁。最近は、夫婦共に対州馬のジョッキーマスターとして島内の草レースに参戦。

シンポジウム「対馬から林業を考える—森里海連環思想の提案」の様子。C・W・ニコル氏が森里海の生き物、人の暮らしを支える森の役割を強調した。



その環境とはどういったものなのか。島の九割が山であり、平地が乏しい対馬は常に人間の食糧不足に悩まされてきた。そのため、土地を巧みに利用し、山の斜面では木庭作という焼畑が戦後まで行われてきた。また、森林の多くは薪炭として利用されてきた二次林で、常に人の手が加えられてきた。つまり、対馬全体が「里島」だったのだ。

ヤマネコはネズミ類をよく食べる。他にはモグラ、カエル、鳥類、昆虫などで、どれも里によく見られる生き物たちである。ヤマネコといっても山ばかりに生息するのではなく、里の方が生息密度は高く、里ネコと表現する研究者もいる。ほとんどの島の人がヤマネコを見たことがないなかで、稲作農家はヤマネコをよく見かけるそうだ。

高度経済成長期以降、対馬の過疎化は歯止めがかからず、里島としての自然への人の働きかけは弱まり、生物多様性は乏しくなってしまった。開発によってヤマネコが安心して暮らせる環境が少なくなったというより、環境の質そのものが大きく変わってしまったのである。

財部能成なまぐべのりなり対馬市長は、昨年一〇月に名古屋で開催された生物多様性条約第一〇回締約国会議の分科会で「生態系ダイヤモンド」という考え方を提示した。ヤマネコを頂点とする陸域の生態系ピラミッドと、マグロなどの大型回遊魚、海生哺乳類を頂点とする海域の生態系ピラミッドを合体させた造語である。この概念には、森も里も海もかけが

えのない「宝」という想いが込められている。

対馬の森は、ヤマネコの餌となるネズミが利用するドングリを育むとともに、ネズミがドングリを貯食することによって森は更新されている。森はミネラルを含んだ水を海に供給する。陸の森は海藻を育て、藻場という海の森は魚介類の生育の場になる。魚が豊富であれば、越冬のために対馬にやってくるアビなどの海鳥、オジロワシ、オオワシも支え続けることができる。

森、里をめぐる環境改善の取り組みとして、ドングリの苗づくりや植樹、人工林における間伐、草原や遊休農地の再生、環境に配慮した農業が進められている。島の面積からすればごくわずかだが、少しずつ行動の輪が広がっている。海では、磯焼けによって消失した藻場の再生などが進められている。

制度面では、自然資源の持続的な利用のために、環境基本条例や森林づくり条例制定、海洋保護区の設置検討が進められている。昨年は、島の住民の意識高揚のために、森、里、海それぞれに分かれて、連続的にシンポジウムが開催された。

ヤマネコが棲む森でとれた木材、ヤマネコが狩りをする田んぼでできたお米、森から海までの命のつながりが育んだ海産物。生産者も消費者も物の背景に広がる対馬の豊かな生物多様性の価値を認めてくれたとき、人も含めた対馬

の生態系ダイヤモンドが輝き、島にうるおいをもたらしてくれると信じている。

「対馬にヤマネコがいてくれてよかった」。そう島の人が感謝を口にしてくれるには道のりは長いが、ヤマネコの保護と島の地域振興が支え合う関係を対馬なりに模索してゆきたい。

対馬は最果てではなく、大陸のフロンティア

—— 島も痩せたが、友も痩せた。魚型を削りながら、だまって潮を見る。だが、おれには夢がある。言いさして友は笑う。深夜、世界図をひらく。コンパスを取る。島を軸に、ぐるっと廻す。——

これは、一九六四年に発刊された『新対馬島誌』の扉に、対馬藩主・宗家の後裔、宗武志氏が序として寄せた誌である。この誌を読んで、富山県発行の「環日本海諸国図」（通称・逆さ地図）を思い起こした。対馬は最果てではなく、大陸のフロンティアであったことに改めて気づかされる。今でもニューフロンティアになれる可能性があるし、島のハンディも十分に乗り越えられるのではないかと元気づけられた。

島にないものは、人もお金も情報も外から引っ張ってくる。ないから何もできないと諦めていては、島は元気にな

らない。その点、歴史的に対馬は外と交わることでそれらを得ていた。生き残りをかけた巧みな戦略を持っていたのである。

情報については、近年、対馬全島ナローバンドから解消されたことは大きい変化である。電子メールをはじめ、ブログやフェイスブックなどのSNS（インターネット上の社会ネットワーク）、スカイプなどのネット電話は便利なものだ。島づくり人材養成大学（日本離島センター主催）、しまの円卓会議（バイオアイランドネットワーク主催）、しまのがっこう（かごしま・島交流の会主催）などで出会った全国の離島の仲間とつながっている。みんなでも島を盛り上げてゆこうという連帯感は精神的な支えになっている。

それらの仲間たちと情報交換し、励まされつつ、何かやりたいと思っても、実際にやる人材が島内に不足している。二〇年後、対馬の人口は一万三〇〇〇人減少し、とりわけ、地域づくりの担い手となる二〇〜五〇歳代が八〇〇〇人減ると推計されている。この予測通りに人口が減少してしまふと、地域はどうなるか。想像すると恐ろしくなる。今のうちに予防的に手を打てないか。そういう不安から企画したのが「対馬市島おこし協働隊」の設置である。

この制度は、対馬への移住、離島振興や自然環境保全などに関心を持つ都市住民を、島おこしの新たな担い手として対馬市島おこし協働隊員」として対馬市が一定年限で雇



バイオアイランドネットワーク主催の「しまの円卓会議」。



対州馬レースでの夫婦対決（写真提供／阿比留裕史）。

用するものである。熱意ある人材が、持てる専門性や経験を活かし、明確な使命感を持ちながら業務に携わることで、島おこしの強化を図る。そういう考えから、特定の重点分野に業務を絞り込み、ヤマネコや対州馬たいしゅうばなどの保全活動をする「生物多様性保全担当」、地域資源の魅力発掘や発信などを行う「島デザインナー」、イノシシなどの害獣の皮を使った製品開発を行う「レザークラフトで島おこし担当」、島内の多様な植物資源を調査し、葉草や健康食品の製品開発を行う「葉草で島おこし担当」の五名を公募した。全国からの反響が大きく、想像をはるかに超えるような優秀な人材の応募があった。外からの血を受け入れることは、あぶのちりほうしゅう雨森芳洲（註3）らが対馬で活躍したように、対馬の歴史そのものである。二〇一一年四月から隊員の活動がスタートし、これからの展開が楽しみである。

対馬の宝であり、日本在来馬八馬種のひとつである対州馬が、今や島内に二八頭と絶滅の危機に瀕している。農耕馬・荷役馬としての役割を失い、島内のわずかな飼い手も高齢化が進んでいる。金がないから、繁殖のための施設や飼育管理のスタッフを増やすことができない。金がないなら、もってこよう。近い将来、中央競馬のGIレースの前座として、対州馬を守るためのチャリティーレースを企画できたらと夢見ている。対州馬は温厚な性格で、乗馬にも適した馬である。昨年は、元中央競馬会トップジョッキー

つしましま 対馬島 data

福岡市から147kmに位置する国境の島。韓国釜山までの距離は朝鮮海峡を隔てて49.5kmである。面積696.10km²、周囲832.9km、人口35,419人（平成23年2月現在）。古代から大陸との交通の要衝となり、古代律令制では1国を形成。鎮国以後は朝鮮との外交・貿易を宗氏の対馬藩が独占するなど特権を保ち、朝鮮通信使の受け入れにもあたっていた。行政・経済の中心地は南部の厳原地域。第1次産業のほか、韓国との交流を深めるなど観光業も盛ん。平成16年3月に2郡6町が合併、1島1市の対馬市が誕生した。



の岡部幸雄さんが島内の草レースに参戦、「対馬記念」と称して走っていただいた。可能性がないわけではない。

最果てで旅費が高すぎるから国内観光客が少ないという状況も変わると思っている。羽田空港の国際化や格安航空会社（LCC）の進出は好機である。これまでの羽田―福岡―対馬空港という国内ルートではなく、羽田―ブサン―対馬という、対馬ならではの海外経由ルートで旅費を低く抑え、意外性・話題性で国内客を誘致できないか、そのル

ートでヤマネコや島の人の暮らしを学ぶエコツアーを組めないかという夢も描いている。

対馬は、他の離島に比べると、立地条件も資源も恵まれている島である。今は、対馬市の職員として対馬に定住させていただいている。ただの地方公務員ではなく、いつまでも対馬の人に夢・笑顔・生きがいを与えられるような「考夢員」でいたい。

註1..ツシマヤマネコは対馬にのみ生息し、東南アジアから極東アジア、朝鮮半島に広く分布しているベンガルヤマネコの亜種である。かつて対馬全域に分布していたが、次第に数を減らし、現在は推定で80〜100頭生息している。その減少要因として、①生息環境の悪化、②交通事故、③わなによる錯誤捕獲、④イエネコからの感染症・餌の競合、⑤野犬、などが挙げられる。

註2..国立公園や希少野生生物の現地管理業務を行う環境省の自然保護官（レンジャー）の補佐役。

註3..江戸時代中期の日本を代表する儒者。近江国出身の木下順庵の門下で、対馬藩に仕えて李氏朝鮮との通好実務に携わった。